

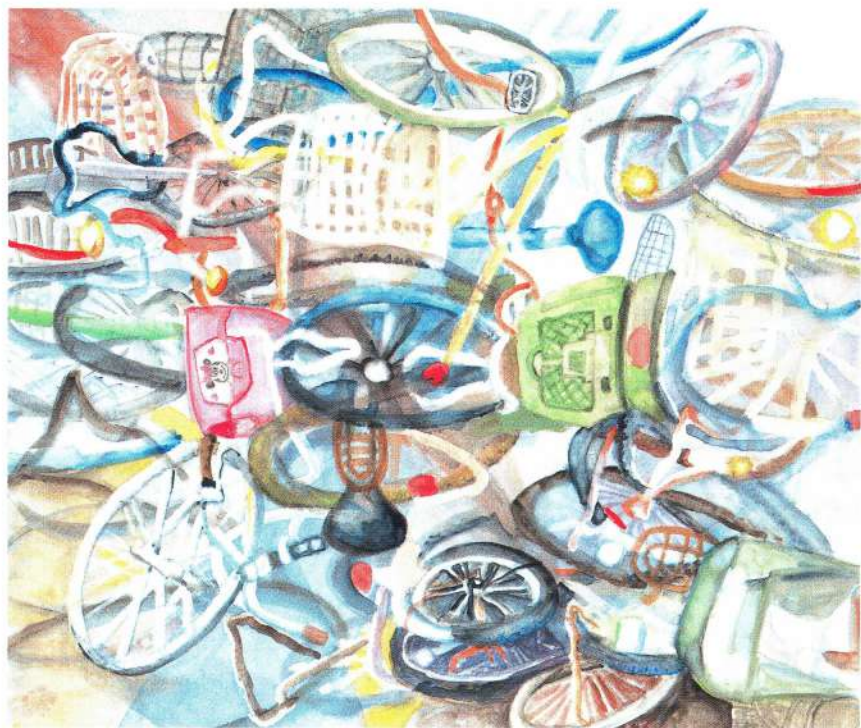
村野次郎創刊

# 香 蘭

二〇二〇年(令和二年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十七卷第二号



2020年(令和2年)2月号

第97卷

第2号

通卷1070号



# 香 蘭

2020年(令和2年)2月号  
第97巻 第2号 通巻1070号

## 目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(54)		
	作品一特選	伊藤(美)・鈴木(桂)・朝香・水本・大井田・坪・松田・高橋・城	伊藤 康子 表二
	作品二、三特選(十二月号)	岩田・白井・江口・牧田・脇谷・丑山・河野・中村(陽)	2
	近詠十五首 見返れば	森田	4
	作品		6
	一		8
	二		24
	三		24
	推薦香蘭集		32
	香 蘭 集		40
	歌の生まれる場所(85)	後藤 彌生	41
	村野次郎への旅(119)	千々和 久幸	21
	七首抄(十二月号)	西沢(君)・野口	22
	エッセイ・自由研究 短歌が結びなおした縁	小 笹 岐美子	39
	魚 点(十二月号) 直喩の妙味	丸 山 三枝子	46
	作品一特選欄評(十二月号)	桜 井 京 子	50
	他誌拜見 110	岡 野 甫 江	52
	近詠十五首 「松花堂弁当」評(十二月号)	満 木 好 美	53
	作品一	市 川 義 和	54
	作品二	渡 辺 礼 比 子	56
	作品三	中 村 か よ 子	58
	香蘭集	庄 司 健 造	60
	緑 地 帯	松 田 ・ 中 島 ( 由 )	62
	明宝研究会第一一三回十一月例会	牧 田 明 子	64
	文法あれこれ(9)	田 端 明 子	70
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		70
	歌会及び会合・会員消息・他		70
	令和二年度香蘭短歌会全国大会のご案内(概要のお知らせ)		70
	編集後記・新宿日記		78
	表紙絵	中村 陽子「重なり合って」	表三
	目次・緑地帯カット		和 田 和 雄

伊藤康子

一茎のいのちみなぎる頂に

ほころび近き牡丹の蕾

『明宝』

昔、行商のおばさんから買った苗が根付いて、以来五十年越しの牡丹が我が家の狭小の庭にあります。蕾が二十を越えて今年は上出来だとか、咲いたの散つたのと漫然と眺めつつ過ごしてしまっています。故に、この歌に惹きつけられ、選ばせて頂きました。

村野先生は、華麗な牡丹の花ではなく蕾に目を留められて、花を咲かせる原動力を「いのちみなぎる」と生き生きと詠まれています。新芽を出し、茎を伸ばし、葉を繁らせる牡丹の「いのち」の力を背景に、花を開かせる準備がいよいよ整い、みっしりと大きくなった蕾の一つ一つに「いのち」が躍動している様と、それを見守る先生の温かい眼差しを感じる事ができます。

今回、『村野次郎三百首』を読む機会を頂き、魅了される歌にたくさん出会えました。ありがとうございました。

（『明宝』1333頁、『村野次郎三百首』59頁所収）

## 四 選 者 の 作 品

することがない 平塚 千々和 久 幸

この世ではすることがない意味もなくスカイツリーに手を振ったりして死を待てる生もあらんか枯れ落ちし木の葉それより行き所なし風に生き風に漂う日々なれば重い荷物は放るに限る

著名人の老衰死の記事読み返すまこと無愛想なその顛末を焼酎も暮らしも臭いほどよろし酔ったふりして飲んではおるがおまえにもオレにもあつた過去という捲れば悪臭放つ頁が新しい眼鏡にいまさら変えたとして世界が味方する訳もなし死に遅れているわが友よためらわず先逝けるわれの後ろ駆け来よ

母の一念 横浜 渡 辺 礼比子

「ごちゃごちゃとめんどうだから詫びておく今日も磨り減るヒールの外側うたたねの際に嵐は過ぎぬらし庭のかたえに鉦叩き鳴くつつがなく嵐避けしとメールあり旅の男はいま甲斐あたりともすれば制されしわが高声を聞けばわらうよこのみどりごはみどりごを守らん母の一念にヤブ蚊はっしと仕留められたり猫逝きてもう脱走の心配もなく開け放つ窓にあきかせ

部屋ごとのドアも襖も少しずつ開けて寝にき猫ありし日はかつてわれを奮起させた一語もてかたえの人を褒むるよ君は

彼岸花 鎌倉 香山 静子

「お出掛けですか」はいはい私の行く先は直ぐそこのクリニックです診察券ばかりが日に日に増えゆけど大病なきを先づはよしとす赤トンボ前を飛びゆく秋の径いづこへわれを誘ひゆくやネコジャラシ風にざわめく畑径をおばあさんが行き赤トンボゆく「赤トンボよついておいで」と言はないが私の本音は一語にゐたいあんなにも花が咲いてたわが庭に一本立てり秋明菊が

崖際にすつくと咲ける彼岸花が手招きして居り此の世のわれを選挙戦の時だけ笑顔で寄つて来る顔見知りなる地方議員は

はじめりは雨 我孫子 丸山 三枝子

病院のリムジンバスを降りてより少し草臥れかなた夕焼け  
老家族住むベランダに吹かれくる公孫樹の黄葉さくらの紅葉  
老家族を置いてわたしは明日からみじかき冬の旅に出かける  
いくつもの川を渡りてゆく旅をしらさぎ号の窓に愉しむ  
スマートフォンスマートフォンの落し物のアナウンス働いてますJ.Rの人  
窓外にぬつとあらわれし観音の切れ長の目は瞑りっぱなし  
紅葉は山を下り来 敦賀すぎ武生を過ぎてまもなく鯖江  
行くほどに空曇りきて目的地福井の旅のはじめりは雨

# 作品一特選



(五選者共選)

ピロードの闇 川崎 伊藤 美恵子

前庭に宮城野萩のなだれ咲く博物館の秋に会いたり

秋の雨しずかにしずかに降る午後を夫が二階でハモニカを吹く  
目覚めれば猫も夫もまだ眠る 一家でねむっていた秋の午後  
何かこと起こる兆しか里芋が不気味な黄色い花を咲かせる  
もの言えば寂しさつのる夕つ方秋のくちびるひつたり閉ざす  
トンネルの中に県境記されてこれより信濃のピロードの闇  
日はすでに山影に入り向う山わが逝く先のごとく黒ずむ

燈 音 西宮 鈴木 桂子

生かさされ来しとも思ふ目をやれば未明の空に欠けし月あり  
母の忌の近づきて思ふ故郷は秋海棠の花の咲く頃

生き継げば八年を切る八十歳までさういふことかわれの今とは

願はくば残れる月日わが生の登音つよくあかるくぞあれ

週のうち四日働きて暮らす残る三日を老いしものは

いひがたきやすらぎのあり踏みゆる枯葉のにはふ夜の公園  
立ち込む榎殻とみ焚たきくにほひ、野辺に立ち満ちのほり来る月を待ちをり

月日も人も 東京 朝香 ふさ枝

山茶花に雨ふりそそぐ黄昏を月日も人も足ばやに過ぐ

とどかざる思い残りて緋月の淡きひかりを夜更けに仰ぐ

なお生きる勇みとなさん買い置きしカシミヤのセーター赤きを羽織る  
自らを知る由もなく美容院の水槽に泳ぐ奇形のメダカ

カラメルで味調えるビーフシチューレシビに残る若き日の文字

この頃の穏やかならざる香港の荒れゆく街を画面に寂しむ

摩天楼の街としきこゆる香港に映画「慕情」の景色はありて

秋まつり 倉敷 水本 美恵子

ぬくぬくの山菜おこはは毎年のJAまつりの目玉のひとつ

山菜おこは蒸し上がるまでを並びをり前も後ろも顔みしりの人  
だんじりの太鼓の音が聞こえればエプロンはづしてだんじりを待つ

門に来た祭りのだんじり一トンがよいしよよいしよと我が家がに上がる

あけ放つ玄關とほりだんじりは祭の鋭気を家にふり込む

実家の味を娘にとどけむと祭りずし朝から混ぜしが喜ばれもせず  
オレオレ詐欺に騙されるのはあなただと公民館まで来て聞かざる

骨董屋

川崎 大井田 啓子

ロータリーを出るバスどれも順調に見えてわたしのバスは進まぬ  
足下がふいに崩れることあらむ舗道を覆ふ櫻の落葉

二十年回りつづけて扇風機だれかに止めてもらつてばかり

青空に綿雲ひとつ浮かぶ午後ステイック糊で切り貼りなどす

骨董屋はひと山として風呂敷に包み四千円のピン札くれぬ

広大な井伊家の靈園の一角にキバナコスモス咲くところあり(井伊直弼家)

さしあたり使ひ道なき小箱なれ明日飲む薬を入れて置かむよ

樂しむように

東京 坪 裕

こつこつと歩き続けて八十年妻を娶つてもう五十年

よろこびのいっぱい詰まった花束が白い腕かたむねに移されており

かすみ草が星座のごとく散らばつてこの花束を豪華にしている

日本がどこかおかしい簡単に誘拐されてる少女もおりぬ

家一軒を樂しむように絡みつき鶯は真赤に色づきており

暗闇を抜けて来たのか黒揚羽秋の日射しのなかを飛びゆく

人生に何本残っているだろう命を繋ぐ赤いろうそく

竹箒手に

川崎 松田 恭子

声を聞く以前に名前示してくる不粋なケータイ無くては困るが

つかまらずすつくと立てたと喜ぶは幼児にあらざる媼のわたし

庭木々も草花ももう要らないと竹箒手に朝の立ち話

背後より追はるる如き暮しにて不意に気付きぬまもなく傘寿

喪中ハガキなど出す破目になりたるを遺影の母に文句たらたら

会ひたい人だあれと問ふに「お母さん」と煥登入れず母は答へぬ

皮黒くなつたバナナはおいしいと言はれつつ卓に放置されゐて

大小の瘤

東京 高橋 登喜

外壁の塗装はお互い様なるに水菓子持ちて挨拶に来る

表札は在りしままなるフルネーム男性雑誌メンズが時おり届く

梅ほどの熟実ほとほと梅雨のころ落としし大樹はヤマモモと知る

職人の平らに塗りしコンクリに朝の驟雨があちこち溜まる

児童らの登校前の櫛にて尾長がとび交う葉を散らしつつ

千人を抱える小学校のあさ六時 給食調理室に灯りがともる

近よれば言いたきことのあるごとし桜の幹の大小の瘤

動体視力

豊中 城 富貴美

台風の去りたる道に散乱の枝や葉つばを朝光が刺す

登校の子らが次つぎ濃き霧のなかへ消えゆく魔法のやうに

目を替へて歩むコースの五千歩のけふはトトロに逢へさうな径

双眼鏡に白き一羽を追ひゆくに動体視力が付いて行かない

乗り換への十三じゅうさんをうっかり通りすぎ終点梅田に来てしまひたり

矢のごとく買ひ物のわれとすれ違ふスケボー少年はやも遠くへ

名士諸氏の「桜を見る会」生臭し苦笑してゐむ西行さんは

# 作品二、三特選



(十二月号作品から) 香山 静子 選

## 〈作品二〉

アクロバット 藤沢 阿部 容子

台風に枯れしセージの細枝を切ればほのかに香りをたてぬ

サーカスのアクロバットの小さき子の下に見守る大きき手のあり

選ばれし客のひとりのおじさんがピエロふたりと笑い生み出す

・対象をつぶさに観察している。

メモ用紙 安来 岩田 明美

指先に吸ひ付くばかりの間引き菜の一握りほどを朝餉の汁に

間引き菜を食べる頃には夏負けもふつ飛ぶと言ひたる姑ははを想へり

没にした歌を書きたるメモ用紙飛行機に折り目いっばい飛ばす

足元をふいに飛び発つちきちきは静かに力を蓄えてゐた

・元氣一杯で自在な発想に惹かれる。

そよると秋が 長野 白井 紀代子

告げざりし言葉のように木の下に遅れ咲きいる女郎花の黄

ひかりさす水の流れにみどり児の手を洗うごと白桃洗う

後からそつと背中を抱くような気配に秋がそよると来て

・三首揃って比喩を上手に駆使している。

しじみ蝶 柏 江口 絹代

淋しさがよしえちゃんに留まりてさみしいのわたしとメールが届く

妙高の見える畑で節子さんが育てしみどりの茄子をいただく

通るたび覗く(ふくろう喫茶店)店主も見えずお客もいない

・発想が楽しく、童話を読んでいたようだ。

歩 幅 鎌倉 高田 みちゑ

退社どき社員ら道にあふれ来て若き歩幅に追ひ越されゆく

終業のチャイムと共に小走りに駅を目指して急ぐ靴たち

生きてゐる限りは止まぬ為業にてご飯の仕度は出来てをります

行き暮れて薄明のなかやうやくに眼下に小き灯を見つけたり

・忙しい現代人の様子が見える。

夏の体臭 藤沢 牧田 明子

けんかした子どもに涙こぼれ夕やけ空は今日をしまひぬ

雷雨去り歩道にはふ土埃夏の体臭とわれは呼ばむか

いく度となくバケツの水に嚙入るる鴉の羽根の収まり切れず

ひからびて土手にならべる向日葵のか黒き種に夏すぎてゆく  
・描写の確実性と同時に適度の抒情もある。

カワウ二羽

我孫子 脇谷 房子

ゆつたりと浮かべる舟にカワウ二羽時のたつのを忘れているよう  
つゆ草のひとつがしんと咲いており丈ひくき葉にかくれるように  
先つぼの赤いもみじ葉長梅雨のしとしと雨に重くたれおり  
きつぱりと九月を咲ける赤い花サツキの知らぬ秋の空かも

・的確な描写の裏に心情がみえる。

〈作品三〉

景色もどらず

さいたま 丑山 眞弓

ハチマキに鼻すじ白く化粧して孫は勇んで祭りの中へ  
年下の上司なるもの気を遣い間違いだらけの敬語を使う  
本を手に居眠りしているあの女は夢で続きを読んでいるのか  
・軽いユーモアがあつて楽しく読める。

けだるき声

鎌倉 小原 裕光

クリニツクのテレビ画面の大笑い待ちいる人ら誰も笑わず  
ケセラセラのけだるき声の聞こえ来るドリステイ笑む訃報の欄に  
幼児の「君に幸せあれ」と唄う声親の唄うをまねているらし  
・声に絞つて詠んでいる特長が見える。

少年の夏

鎌倉 河野 慎二

トウモロコシ畑の中には少年の夏がありますパーチャルぢやない  
むつつりと父のやうなる晩夏の夕日が沖に沈みゆきたり  
こんなにも猫の遺灰は少なくて死にしはわれの一部といふべし  
愛になほ迷ふ者らの足もとで割れしグラスの綺羅の散乱  
・鋭い感覚によつて支えられた作品群。

朱の矢印

横浜 小林 純子

迷子なる我を誘ひあきあかね朱の矢印となりて十月  
被毛なき獣と生まれ太陽の落款押さるる背せなの熱かり  
半幅を「吉弥」に締めて鬼灯の市を冷やかす浅草あたり  
右手より衰へ早き左手に褒美の如くサファイアの青  
・思い切つた表現がいい。

ひまわり

東京 中村 陽子

悲しいほど明るい色のひまわりは向きを揃えて蒼空に咲く  
蓮の葉の真中に兩粒集まってブルブルゆるゆる輝きながら  
亡き夫がいつも乗りいし自転車せうたの錆びたハンドルに夕日があたる  
・光や色彩を捉える感性を大切にしたい。



# 見返れば

森田 徹

過失あやまちは誰にもあるを今となり暴かれているやや誇張して

過ぎゆきのわれの過失をやわらかにされどじんわりと責むる人あり

妬ねたみ嫉そらみ誰の心にも住むという思い当たることわれにもありぬ

折れ曲がるわが道老いて見返ればただ茫々となべて虚しき

描きたるわがモチーフも何時しかに色褪せゆきて余命生き継ぐ

老いの身にかかる退屈はとうぜんとさばさばとして終日過ごす

萎なえ萎えて用を為さざるわが足は正座を二度とすることはない

先のことは何も考えぬことにしてこのひと時はわれだけのもの

老いてゆく証かベッドに身を置けば寝返るごとに鳴る背と腰の骨

わが言葉針を含みていたるらし厨に妻は向きを変えざる

和するなき妻はわが飲む晩酌にだんじて酌をすることはない

ひと言随想

妻のひと言

父系遺伝の酒に溺るるわが性を八十路半ばの今も堅持す

志こころざし 我われにありしや意志強く我は生きしや貧むかひり生きししのみにあらずや

異国語の氾濫するなる天神町かの大空襲の痕跡はなし

青春を戦後の混乱に過ごこしきて異国語氾濫する街にいま老ゆ

妻とは次の二点を了解事項としてゐる。一つは延命治療をしない。二つ目は癌の検査も治療もしないである。十七歳から四年間の闘病生活をした私は、八十五歳まで生きるとは夢にも思わなかった。この調子では、東京オリンピックもテレビ観戦が出来そうである。先日妻が、「あなたは自分が先に逝くと決めているけど、私が先に逝くこともあるんですよ」と言い出した。全く考えていなかったこ

となので愕然とした。妻とは六歳違いで、男女間の平均寿命の差もあり、当然私が先に逝くものと勝手に思っていた。

妻の言葉を聞いて以降、何となく気持ちが悪く落ち着かない。急いでエンディングノートを取り出したり、果たして自分の人生はこれで良かったのかと振り返ってみたり、全ての日常生活のリズムが狂って来た感じである。このような心の揺れを入れて詠んでみた。

村野次郎への旅 (1119)

## 「ザムボア」と次郎 (十二)

「ザムボア」(朱欒)第四卷第二號(二月號)は、大正七年(1918年)二月八日に發行された。総頁數51、表紙は白秋の朱欒の実のスケッチである。巻頭には北原白秋の論文「朱欒の蔭から(一)」が11頁に亘って掲載されている。

前月号(第四卷第一號)では白秋の「推讃の辭」によつて華々しく歌壇に押し出された次郎だったが、この号には河野慎吾の作品はあつても村野次郎の作品は無い。目次には前月号歌壇抄、正月號歌評に慎吾と共に次郎の名前が見えるだけである。

わたしの凡庸な感覚からすれば、前月号であれほどまでに白秋が熱を籠めて激賞した両新人だから、間髪を容れず次号に特集号くらいは組んでもおかしくないと思うのだが、事實はかくのごとき誌面であつた。

つまり次郎は裏方に回つて、誌面を支えているという恰好である。河野慎吾も出詠歌は

## 千々和久 幸

六首だから、例月の習いと変わらない。いささか拍子抜けの感はあるが、これが白秋の凡庸ならざる編集センスであらう。

さてこの号では、巻頭に白秋の10頁に亘る論文が目を引く。

この論文は、もともと東京日日新聞の募集「國詩」の審査委員の一人として、その意義を同紙上に発表したものの再録である。

簡単に言えばこの論文は日本の詩の形式とその特質について、白秋年来の持論を披瀝したもので、その論の広がりには俳句、短歌、小唄、自由詩さらには小説にも及んでいる。ここではその一部を抜き書きするに留める。

兎に角、上の如く、和歌俳句以外の、日本人に適應した新短詩が、殊に現代語を以て歌はるべき短詩が、必ず今日に於て出現せねばならぬ歌であるこれはかう來なければならぬ

事であつて、私も苦しみ抜いた末此處までは辿りついたが、此は容易な事では無い。眞の天才にして初めて能く爲る事である。あ、光榮ある發見が私の前に有る。而も私は恐らく先驅者の悲哀を思ふさま嘗め盡して、眞に來たる者の爲に犠牲的殉死を遂げるであらう。私はまだ脆弱である。(中略)

新詩の體は元來が西歐の詩風に淵源してある爲め、あまりにその影響を蒙り過ぎた。例へば彼の佛蘭西の新聲として往年踏襲せられ唱道せられた象徴詩の如き却つて古來より東洋殊に日本に藝術の眞髓とするものであつたのである。疑ふ人は人麿、芭蕉、北齋その他の詩歌繪畫の類を調べたがよい。

彼の象徴の所謂沈黙直觀、暗示の提唱の如き却つて東洋藝術の本領に向ふより接近して來たのである。近時の後期印象派、未來派、三角派の如き波斯、印度若くは日本の直覺的象徴藝術の影響の與つて至大である事を知つたら全く思ひ半に過ぐるであらう。

(原文のまま、行換えは筆者)

いささか難解な部分もあるが、新体詩もそうなら、白秋が日本古來の詩歌に深く導かれ

ていることが窺える。象徴という詩歌の方向は、すでにこの頃から白秋が抱いていた詩論の中心にあつた。齋藤茂吉の「実相観入」と併せて理解をすれば興味深い。

次いで先に紹介した慎吾、次郎の「正月號歌評」を覗いてみよう。

・夕ざりて風ふきければ藪のなかほそほそと  
かよふ種白く見ゆ 酒井 廣治

○河野。二句の「風ふきければ」はや、理屈が勝つて、しつくりと自然と融合しきらないう所がある。が下句は却々宜い所を捉へてゐる。○村野。歌凡て爽かにして讀ませる丈けの價値を有してゐる。下句は結構である。作者のところが宜く表はれてゐる。「ければ」はいけない餘り重々しく腰を据込んだ感がある、そして下のほそほそと言ふ氣持に全く添はなくなつてゐる。

・大葱の葉尖ことごとくへし折れて霜白き朝  
の畑に出でつも 荒木 暢夫

○河野 荒木君は勉強して呉れるので有難い。この一首の三、四、五句はも少し言葉のリズムと心持の確實性を強調して貰ひたかつた。○村野。君は技巧に構はず無造作に表現してしまふ癖がある、之が所謂君の長

所でもあり缺點でもあると言ふ所である。此の歌及び3、8等其の例に洩れない。大膽と言ふ事が成功する時だけに使用されるとういと常に思つてゐる。此の歌の結句は餘韻なき恨がある。

・人が皆かむれる白き手拭の光り淋しき青菜  
の畑 石野正太郎

○河野。結句の名詞止がいけない。「白き手拭」「青菜の畑」の白と青の對照が餘りきわど過ぎる。青のなかに白いものを配合するのは絵畫的色彩法としては必要であるが、歌として殊に此の一首の場合に於ては、それ以上の何ものも出てゐない、之は考ものである。もつと深いものを求めて單に眼先ばかりの歌をなるべく避けて載きたい。

○村野。最初の歌の名詞止は重すぎるし最後の歌の下句の轉換した方法は軽すぎた。序に結句について一言する、一体結句は他の如何なる部分より重要である。其は讀過してから他の部分より一番印象が深く残る事から原因する。西洋や支那の詩が日本のものより最後のリズムを合せて行く事に付いて一層苦しむのは茲に根據を置くからである。吾々のよくよく注意すべき事と思ふ。

河野、村野ともにその奮闘ぶりが窺える。わたしも初心の頃は、評者の一言一句を熱心に讀んだ記憶がある。

ところでこの号には「校正室にて」とタイトルされた、埋め草と覚しき一段がある。そこには次郎、貞吉の名でこんな戯れ歌が掲載されている。著休めに披露しておこう。

今宵ことにやさしき心起り來て使のものに  
茶を飲ませけり 次郎

・校正に慎吾は見えずわか草の妻とこもりて  
よろしくあらむ

・ペンの赤きインクふかめと海綿を水にひた  
してあたりけんかも

貞吉

・たんねんに淀橋の次郎書しつづ浅夜の雨を  
寂しと言ひぬ

・喜一郎の病まつたく癒えたれど校正に來じ  
と言ふ、逢ひたきものを

・寂しがる動坂の家に待ちわびて先生は夜の  
雨き、居らむ

草舎の会員には顔の見える歌だらう。